2012年4月13日

日本空港ビルデング株式会社

羽田空港国内線 第２旅客ターミナル ３階
ディスカバリーミュージアム 第７回企画展について

日本空港ビルデング株式会社は、第２旅客ターミナル本館南側3階にある国内空港初の空港内美術館「ディスカバリーミュージアム」において、4月25日（水）より第7回企画展「信長・秀吉・家康〜天下取りの書状展〜」を開催いたします。

本能寺の変の約1ヶ月前に織田信長が残したメッセージや、信長亡き後、驚くべき早さで天下統一への手を打つ豊臣秀吉、関ヶ原の戦い直前の徳川家康の戦略が読みとれる書状などを展示します。そのほか重要なメッセンジャーでもあった、歌人 烏丸光広や茶人 千利休の書状も展示。天下の変遷、戦国武将の駆け引き、権力者達のメッセージを、書状を通してディスカバリー（発見）してください。

記

１．次回企画展　　「信長・秀吉・家康〜天下取りの書状展〜」（入場無料）

２．期　　間　　2012年4月25日(水)～2012年6月24日(日)（期間中無休）

※「明智光秀覚書」は作品保護のため、6月17日（日）～24日（日）のみ展示、それ以外の期間は複製にて展示。
※期間中、毎週水曜日（14:00～、16:00～）にギャラリートークを実施予定
※作品保護のため、一部展示替えになる場合がございます。

３．ディスカバリーミュージアム概要
（１）場　　所　　第２旅客ターミナル３階 南端
（２）開館時間　　平　日　　11:00～18:30（最終入場18:00）
　　土日祝祭日　10:00～18:30（最終入場18:00）
（３）電話番号　　03－6428－8735
（４）ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　　http://www.discovery-museum.com

以　上

※すべての展示作品は永青文庫の所蔵です。
永青文庫・・700年の歴史を持つ細川家の至宝を管理し、国宝8点、重要文化財31点をふくむ、およそ6,000点の美術工芸品と50,000点以上にのぼる歴史文書を所蔵している美術館。

【 本件に関するお問い合わせ先 】
日本空港ビルデング株式会社
事業開発・運営本部
施設管理部　広告・イベント課
電　話（03）5757－852

【主要作品】

織田信長朱印状／天正 10 年（1582）4 月 24 日

本能寺の変の約 1 ヶ月前に織田信長が細川藤孝に宛てた最後のメッセージ。1582 年、中国地方進出のため、秀吉を毛利攻めにあたらせていた。朱印状には「いつでも出陣できるよう用意をせよ、詳しいことは光秀から知らせる」とあり、明智光秀が信長に信頼され、毛利攻めの軍事指揮権を与えられていたことがわかる。だが、天下布武の道は、信頼を寄せた重臣・光秀によって絶たれたのだった。

明智光秀覚書／天正 10 年（1582）6 月 9 日

1582 年 6 月 2 日未明、信長は本能寺で光秀に討たれた。その 7 日後に細川家に送られた光秀の覚書。細川家は光秀配下の与力であり、さらに嫡男・忠興の妻は光秀の娘・玉であったが、藤孝・忠興父子は元結いを切って信長への弔意を表し、事態を静観した。三ケ条の覚書が記されていたが、藤孝と忠興はその依頼に応えず、光秀は秀吉に追いつめられていくことになる。

豊臣秀吉知行宛行状／天正 17 年（1589）9 月 27 日

本能寺の変から約一ヶ月後。光秀からの誘いを拒絶した藤孝・忠興父子が手を組んだのは、羽柴秀吉だった。1589 年、秀吉は諸大名の領地を定める。発行された知行宛行状には、領地の石高に応じた軍役が記されていた。石高制軍役の始まりである。隠居して幽斎となった藤孝と、当主となった長男・忠興（羽柴姓を賜っている）には丹後一国が与えられ、四千人の軍役が課された。

徳川家康書状／慶長 5 年（1600）8 月 12 日

秀吉が去った後、徳川家康と、石田三成を中心とする豊臣勢力は、東西二派に分かれ敵対していく。合戦の経験・政治力ともに圧倒的な力を誇った東軍大将・家康は、豊臣恩顧の大名らに大量の書状を送り同盟を呼びかけた。その数は関ヶ原の戦いのあった１６００年だけで１６９通にのぼったという。忠興への書状には、「東軍と共に戦い、勝った後には、現在の領地・丹後を保証した上に但馬一国を与える」とあり、戦の前に領地の加増を約束していた。

幽斎書入和歌　烏丸光広試筆
／桃山～江戸時代（16 世紀）

１６００年、幽斎は丹後田辺城に籠城する。幽斎は日本初の勅撰和歌集・古今和歌集にまつわる秘伝の伝承者であった。古今伝授の断絶を恐れた朝廷が勅使を派遣して和議が成立し、幽斎が開城したのは関ヶ原の戦い開戦の２日前であった。本状はこの時の勅使でもあり、幽斎の弟子で古今伝授の伝承者にもなった烏丸光広が「山家虫」と題した和歌を、師である幽斎が評して書入をしたもの。

千利休書状／桃山時代（16 世紀）

千利休が春鶴という人物に宛てた書状には、「時鳥聞くほどの事　浮世かな」の句があり、聞く事は憂き世のことばかりというこの句の心がお解り頂けるか、難しいだろう、浮世で聞くに値するのは時鳥の声ばかりであると解釈して頂いてもよいかと思う、と綴られている。茶頭として信長・秀吉に仕えた千利休。穏やかな心でお互いを尊重し心の内と外を清らかに保つ～和敬清寂を重んじた利休であったが、国を動かす政治の世界に巻き込まれていく。